

プロクロスにおける「一者」の研究 (二) — μέθεξις τοῦ ἐνός の意味 —

岡崎 文明
人文学部哲学研究室

梗概

序論

- (一) 先稿のまとめ
- (二) 先稿との関連と命題二―三までの粗筋
- (三) ドッスによる粗筋と本稿の意図

… 二頁

第一章 命題二

第一節 命題二の「テーゼ」

- (四) 命題二の「テーゼ」

… 三頁

第二節 プラトンにおける分有

… 三頁

- (五) プラトンの『バイドン』の分有論
- (六) 右の分有論はプロクロスには直接当てはまらない
- (七) プラトン『パルメニデス』のテクスト
- (八) 右の分有論はプロクロスのそれと必ずしも同じではない
- (九) プラトン『ソピステス』のテクスト
- (一〇) 右の箇所に分有論はアイデア間において成立
- (一一) 右の箇所のプロクロスの解釈
- (一二) 分有の基本的性格―アイデアとそれを分有したものとの区別

第三節 命題二の「証明」

- (一三) 証明の論旨

… 六頁

第二章 命題三

- (一四) 証明の第一段階 (一)―テクスト
- (一五) 同右 (二)―を分有したものは一そのものではない
- (一六) 同右 (三)―を分有したものは一を受け取った
- (一七) 証明の第二段階 (二)―テクスト
- (一八) 同右 (二)―を分有したものが純粹な一である
- (一九) 同右 (三)―右は不可能
- (二〇) 証明の第三段階 (二)―テクスト
- (二一) 同右 (二)―を分有したものは全く一でない
- (二二) 同右 (三)―右は純粹の多となり存在し得ない
- (二三) 証明の各段階のまとめ
- (二四) 証明の第四段階 (二)―テクスト
- (二五) 同右 (二)―を分有したものそれ自体は純粹の一ではない
- (二六) 同右 (三)―それは「一でありかつ一でない」
- (二七) 同右 (四)―それは一と共に一以外の交ざりものを持つ
- (二八) 結論―テーゼ

… 九頁

第三章 命題三

第一節 命題三の「テーゼ」

- (二九) プラトンとアリストテレスの一種の綜合―分有と生成

… 一〇頁

第二節 アリストテレスの現実態と可能態

…一〇頁

- 〔三〕 現実態は可能態よりも先である
- 〔三〕 『形而上学』のテキスト
- 〔四〕 アリストテレスの動の原理―現実態によって可能態が現実態となる
- 〔五〕 もうひとつのテキスト―不動の第一動者
- 〔三〕 「一」と「二」を分有したものに現実態と可能態の原理を適用
- 〔三〕 アリストテレスとプロクロスの相違点

第三節 命題三の「証明」

…一二頁

- 〔三〕 証明の論旨
- 〔三〕 証明の第一段階(一)―テキスト
- 〔四〕 同右(二)―「一と成るもの」は「一なるもの」を受け取った
- 〔四〕 同右(三)―その理由
- 〔四〕 現実態と可能態の考え
- 〔四〕 証明の第二段階(二)―テキスト
- 〔四〕 同右(二)―多は一と成ることを受け取る限りについて一を分有する

第四節 本章の結論とまとめ

…一四頁

- 〔四〕 分有即生成はプラトンとアリストテレスの一種の綜合
- 〔五〕 プロクロス哲学と中世哲学の決定的相違

全体の結論

…一四頁

- 〔五〕 プラトン、アリストテレス、中世哲学との関連

註

…一四頁

Zusammenfassung

序 論

〔一〕 拙稿は先稿『プロクロスにおける「一者」の研究(一)』〔一〕に引き続いて、プロクロス哲学における「一者」の意味を明確にしようとする意図を持っている。

先稿においては、『神学綱要』の命題一を検討することによって「多はどんなものであっても \wedge ― \vee 乃至 \wedge ―なるもの \vee を何らかの仕方分有しており、決して \wedge 純粹の多 \vee は存在し得ない」ことを明らかにした。しかしながら、命題一では、まだ「分有」の意味が分明ではなく、したがってこの限りでは「一」乃至「一なるもの」が超越的な形而上学的「一」としての「一者」の性格を十分に備えているとは言えないものであった。

〔二〕 ところが、同書では引き続きその命題二から命題四にかけて分有の意味が次第に明瞭にされて、「一なるもの」と「多」とが十分に区別されるに至るのである。しかしなお「一なるもの」の超越性はここに至ってもまだ確立されているとは言えないのである。

そしてその次の命題五において、「一なるもの」は「多」に「内在」しながらも、しかも前者は後者に「先立つ」ことすなわち前者が後者から「超越している」ことが明確にされる。かくしてようやく超越者なる「一者」がその姿を現すのである。

しかしこれで万有の根源としての「一者」が確立したわけではない。この「一者」は実はまた「善なるもの」でもあるのである。命題七から命題一三にかけてこれらの両者が綜合される。かくして「善一者」あるいは「善なるもの一なるもの」という形而上学的超越者がひとまず確立するのである。これがプロクロス哲学における万有の根源と言い得るであらう。

(三) 右の事情は E. R. Dodds によると、次のように説明されている。

『神学綱要』命題二から命題四は「部分的な一」(「多」)から「純粹の一」(「なるもの」)を区別し、かつ吾々が経験する「部分的な一」は「純粹の一」の存在を伴っていることを示している。また、命題五はどんな「部分的な一」も「究極の根源」(「万有の根源」)であることはできず、したがって「純粹の一」こそ「究極の根源」であるということを確立している。そして命題六は「部分的な一」を「一を含む多」と「多を含む一」の二つの段階に分け、それらにそれぞれ副根源の位置を割当て、「原因の階層」(the hierarchy of causes) 説の基礎になっている⁽²⁾。

さて、拙稿では、これらの観方に沿って、先稿と同様の仕方、命題二と三を順次検討し、分有という概念を明らかにしながら、如何にして「一なるもの」と「多」とが区別されるかを明確にして行くこととしよう。

第一章 命題二

第一節 命題二のテーゼ

(四) 命題一では「分有する」(μετέχειν)ということが述べられていたが、これにはいまだ十分に明確なる限定がなされていなかった⁽³⁾。命題二ではさらにこれに或る限定を加えるのである。

命題二のテーゼはこうである。

「一なるものを分有するものはすべて一でありかつ一でない⁽⁴⁾。」

ところでこの意味を正確に知るために吾々は「分有」の概念をめぐって若干の考察をしなければならない。

第二節 プラトンにおける分有

(五) 周知の如く「分有」という概念はプラトンに始まるが、これは第一に、「イデア」(乃至「エイドス」)と「個物」の間で成立する一種の関係である。例えば、『パイドン』(100e3)に見られる如くに、「美しいもの」(個物)は「美そのもの」(イデア)によって美しいのである。この事態を指して「美しいもの」は「美のイデア」を分有していると言われる⁽⁵⁾。

ところで、「美しいもの」、例えばそれを桜の花としよう、これは「美のイデア」を分有しているばかりではなくて、それ以外のものをも、例えば桜の花は一定の姿や大きさ等をも持っているのである。このように個物は当のイデアのみならずそれ以外のものも分かち持っているのである。

(六) さて、プロクロスは、命題一に見られたように、「一なるもの」と「多」との間に原則的に分有関係を認める。しかしながらこの分有関係は必ずしも右の如きプラトンの「イデアと個物」の間で成り立つ分有関係ではないのである。というのはプロクロスの問題とする「多」は必ずしもこの自然宇宙内の個的な存在者(あるもの・有るもの)を指すばかりではなくて、自然宇宙を超えたイデアをもまた含んでいるからである。それゆえ「一なるもの」は、言うならイデアのイデアとなる。したがって、右記『パイドン』の議論は直接的には当てはまらないのである。

(七) それではプラトンは「イデアと個物」間の分有関係しか認めていないのであろうか。いや、そうではなく、イデアの領域においても諸イデア間の分有関係を考えているのである。この考えは特に彼の後期著作において見られる。

そこで後期著作の一つである『パルメニデス』の或るテキストを見てみよう(傍点は筆者)。

「したがって、一以外のものも部分をもつならば、また全体を分有し、一を分有することにもなるだろう⁽⁶⁾。」

また少し後にはこう言われている。

「とは言え、それ(部分)が一を分有するのは、むしろ一とはちがう他のものである限りにおいてだということになるだろう。なぜなら、もしそうでなかったら、「一を」分有などしていなくて、自分で直接に一であったらうからね。しかし実際には、直接的に一であることは、一そのものの以外には不可能だと思ふ⁽⁷⁾。」

〔八〕『パルメニデス』という著作は、分有論つまりアイデア論の反省のために、また「世人が空理空論と呼んでいるようなものの中を通り抜けて行く練習をする」ために書かれたとされる⁽⁸⁾。それゆえに右のテキストで言われているところの「一」あるいは「一そのもの」はプロクロスの言うところの万有の根源たる「一者」と同じであるのかどうかは検討の余地があるが、しかしこの問題を一先ず棚上げにすれば、同書は少なくともテキストの上では「一そのもの」と「一以外のもの」との間の「分有」関係に言及し、かつその関係があることを認めているのである。

〔九〕次に、同様彼の後期著作である『ソピステス』のテキストを、少し長くなるが、見てみよう(傍点は筆者⁽⁹⁾)。

エレアからの客人「では次にどうだろう、——彼らは八全きもの[∇](全体)というものを、[∧]あるところの一なるもの[∨](実在する一者)

と別のものであると言うだろうか、それとも、同じものであると言うだろうか?」

テアイテトス「もちろん同じものであると言うでしょうし、またげんに、そう言っています。」

エレアからの客人「では、もしそれ〔実在する一者〕がひとつの全体であるとすればどうなるか。ちよūdパルメニデスも、こう言っているようにね。——どの側からみても まんまるい球の塊に似ていて まんなかからあらゆる方向に均等を保つ。ここあるいはかしこにおいて より大きくまた小さいということは あつてはならぬことだから——。[∧]あるもの[∨](有)は[∴]中心と端を持つているわけであるし、そしてもしそうとすれば、まったく必然的に、もろもろの部分をもっていることになる。それとも、どうだろうか?」

テアイテトス「そのとおりです。」

エレアからの客人「ところでたしかに、このように部分に分けられるものが、一なるものであるという状態をそれら諸部分全体の上にあたえられてもつていいることは、何ら不可能なことではないし、かくてそれはまさにそのような仕方、総体であり全体であるとともに、一つのものであつて何ら差支えないだろう。」

テアイテトス「もちろんその点は、いっこうに差支えありません。」

エレアからの客人「真の意味における[∧]一なるもの[∨](一者)は、正確に論じるならば、絶対的に部分に分かたれないものと言わなければならぬはずだ。」

テアイテトス「たしかにそうでなければなりませんね。」

エレアからの客人「しかるに、いま問題にしているような、多くの部分からなるものは、この定義に合致しないだろう。」

タイテトス「わかりました。」

〔一〇〕この箇所で言われていることは、「あるところの」は「部分からなる全体」であるということであり、そしてこれは「一なるものの状態」(κόπος τοῦ ἑνός)を受け取って持っている(ἔχειν)と言われている。

これは「分有」という言葉を直接使っていないが、その「全体」は「真の意味における」一なるもの「を」分有している「ことを述べているのである。

この「真の意味における」一なるもの「は」プロクロスの言う超越的「一者」と正確に同じであるかどうかは検討の余地があるがそれを別問題としても、しかし少なくとも「部分からなる全体」とされる「あるところの一なるもの」(実在する一者)は同書のコンテキストや用語法からイデアであると理解される。したがってそれが分有する「真の意味における」一なるもの「は」イデアのイデアと言いうことができるであらう。このように、プラトンにおいては、イデアの領域において諸イデア間の分有関係が認められていて、その探求も展開されていることが確認されるのである。

〔一一〕プロクロスは、プラトンの『ソピステス註解』の中で、まさに右の「真の意味における」一なるもの「を」迷うことなく万有の根源なる「一者」と解釈し、そしてこう註釈するのである。

「ところで、もし一方で、それ自体において多を持っている根源が一つであるなら、これはこのものにおける多くの諸部分からなる、あ

るいは諸要素からなる何らかの全体であるだろう。他方では、これは「真の意味における」一なるもの「ではなくて、「一なるもの」の状態を受け取っているのである。吾々が(プラトンの)『ソピステス』(245a)において学んで知っているように⁽¹⁰⁾。」

ここでは「多を内在させている根源」は「諸部分からなる全体」であり、かつこれは「真の意味における」一なるもの「の状態を」受け取った(分有した)もの「であると言われているのである。

以上から理解されるごとく、プロクロスはまさに『ソピステス』における探求を受けこれに依拠してこれを右の如く解釈し、「一なるもの」と「一を受け取ったもの」との間に分有関係を適用するのである。

〔一二〕ところでプラトンの「分有」においては、「イデア」と「それを分有したものの」二者が見られる。「イデア」は純粋にその性質を持ったものであり、それ以外の交ざりものを持たない。これに対して、「それを分有したものの」はイデアの性質と共にそれ以外の性質も持っているのである。このようにして「イデア」と「それを分有したものの」は明確に区別される。

ところで、プロクロスの「一なるもの」と「一なるものを分有したものの」においても同様の事情が成り立つ。「一なるもの」は交ざりもののない純粋な一であってそれ以外ではない。ところが「一なるものを分有したものの」は一以外のもの——例えば「全体」や「部分」や「有」といったもの——をも持つのである。

それゆえ、「一なるものを分有したものの」は二面性を合わせ持つ。それは第一に、「一なるもの」を受け取っているがゆえに「一という性質を持ち、したがって「一である」と言われる。しかしそれは第二に、一以外の性質も交ざり混んでいるがゆえに、この点で「一でない」と言われ

るのである。これが「分有」の基本的な性格である。

命題二はこれを証明しようとするのである。ここに「分有」の概念は命題一より更に一步踏み込んで限定されていると言えるであらう。

第三節 命題二の「証明」

〔二三〕 この証明の論旨はある意味で明快である。

「一なるものを分有したものは三つの可能性を持つ。第一は「純粹の」ではなく「一を受け取ったもの」、第二は「純粹の」¹¹、第三は「全くでないもの」である。そしてこれら三つの可能性から第二と第三の可能性を除き、その中間の可能性(第二)を残し、「分有する」ということの意味は「一であると共に一でない」ことになると結論するのである。

これは「枚挙消去法」⁽¹⁾であり、また「否定の道」(via negativa)の一種である方法論である。以下にこれを見よう。

〔二四〕 まず証明の第一段階として、「一なるものを分有したものは「純粹の」ではなくて、「一なるもの」を分有という仕方です」¹²「受け取った」(perovdevai)のであるということ明らかにする。そしてこの「受け取った」ということの意味が、最後のテキスト(IV)で明らかにされる。さて、最初のテキストはこうなっている。

〔I〕 「もし \wedge 一なるものを分有したものが \wedge 一そのものの \vee でないなら(なぜなら、それは \wedge 一なるものの \vee 以外の何かであるので、 \wedge 一なるものの \vee を分有するのだからである)、それは分有によって \wedge 一なるものの \vee を受け取ったのであり、そして一となったことを被ったのである」⁽²⁾。

〔二五〕 右の証明を順次詳しく検討していこう。

〔I〕 の文の前半である。

〔1〕 「もし \wedge 一なるものを分有したものが \wedge 一そのものの \vee でないなら(なぜなら、それは \wedge 一なるものの \vee 以外の何かであるので、 \wedge 一なるものの \vee を分有するのであるのだからである)、」

この文は、「もし…なら」という仮定文の形式で導入されているが、内容的には実は単なる仮定ではなくて、むしろ定言されていると考えられる。というのもこの文に続いて直ちに「(なぜなら、…のだからである)」という理由文が付されているからである。

あるものが「一なるもの」を分有するのはそれが「一なるもの」でないからである。もしそれが「一なるもの」であるなら、それを分有する必要性は元々ないからである。したがって「一なるものを分有したものは「一なるもの」すなわち「一そのもの」でないものである。

〔二六〕 〔I〕 の文の後半は前半の文に対する帰結文である。

〔2〕 「それは分有によって \wedge 一なるものの \vee を受け取ったのであり、そして一となったことを被ったのである。」

「一なるものを分有したものが「一そのもの」でないなら、一つの可能性として、「分有という仕方によって \wedge 一なるものの \vee を受け取った」のであり、その結果「一となったことを被った」のである。そしてこの意味が後に「三三」検討されるのである。

〔二七〕 次に、「一なるものを分有したものは、もうひとつの可能性の「純粹の一である」ことを検討して否定する。これが証明の第二段階である。そのテキストは以下のとおりである。

(Ⅱ)「そこで一方、もしそれが△一なるもの▽以外の何ものでもないとする、それはただ△一なるもの▽のみである。するとそれは△一なるもの▽を分有しているのではなくて、△一そのもの▽であるだろう⁽¹³⁾。」

(二八) 右の証明を詳しく検討しよう。

(1)「もし一方、それが△一なるもの▽以外の何ものでもないとする、それはただ△一なるもの▽のみである。」

「一なるものを分有したものの」がもし「一なるもの」以外の何ものでもないなら、それは「純粹の一」である。

(二九) 次に、

(2)「するとそれは△一なるもの▽を分有しているのではなくて、△一そのもの▽であるだろう。」

するとそれは「一そのもの」となってしまうであろう、と言うのである。

とすれば、「一なるものを分有したものの」が「純粹の一」「一そのもの」であることは矛盾となる。

なぜなら、「一なるものを分有したものの」が「一そのもの」「純粹の一」であるなら前者は後者を「分有」する必要などはなく、したがって「分有したもの」でないことになるからである。「一そのもの」でないからこそ、まさにこれを「分有する」ことができるのである。(二二 参照)したがって、右のテキストの後には、

(3)「しかしこれは成り立たない。」

という意味の一文が省略されていると考えられる。

(二〇) 次に証明の第三段階である。「一なるものを分有したものの」は第三の可能性の「全く一でないものである」ことを検討し、そして否定される。そのテキストは以下のとおりである。

(Ⅲ)「他方、もし△一なるものを分有したものの▽が△一なるもの以外の何か▽であり、一でないならば、このゆえにそれは一ではなく、また△まさに一なるもの▽でもない⁽¹⁴⁾。」

(二二) このテキストを検討してみよう。

(1)「もし△一なるものを分有したものの▽が△一なるもの以外の何かであり、一でないならば、」

ここで言う「分有したものの」が「一なるもの以外の何か」であるなら、それは「多」以外にはない。しかし「多」は「何らかの点で」一を分有している。したがって「多」は何らかの点で「一」と言えるであろう。ところがこれが「一ではないもの」とするなら、これは「全ゆる意味で一ではないもの」という意味になるであろう。したがってテキスト(2)の意味するところは、「△一なるものを分有したものの▽が△全く一でないもの▽であるとするならば、」ということになるろう。

(二三) 続いて、

(2)「このゆえにそれは一ではなく、また△まさに一なるもの▽でもない。」

このゆえに、当然それは「まさに一なるもの」「純粹の一」でもない

のである。

しかしこういうことはそもそも成立し得ない。なぜなら、「全く一でないもの」は「純粹の多」であるが、しかし「純粹の多」は存在し得ないことは既に命題一で証明されているからである⁽¹⁵⁾。

それゆえ、右のテキストの後は、(II)と同様に、

(3)「しかしこれは成り立たない。」

という意味の一文が省略されていると考えられる。

(二二二) さて次を検討するために今までの証明の諸段階の結論をみてみよう。

第一段階では、「一なるものを分有したもの」とは一体何であるのか、その可能性の一つは「一なるものを受け取ったもの」であると結論された。(二四一六)

第二段階では、それはもうひとつの可能性を持つ。つまり「純粹の一」「一そのもの」である。(だがテキストには明記されていないが、この可能性は当然成立し得ない。(二七一五)

第三段階は、それは「全く一でない」つまり「純粹の多」である可能性がある。これも(テキストに明記されていないが)当然成立し得ない。(二〇一三)

(二四) そこで最後の第四段階である。「一を分有したもの」は残る可能性としては、右の第一段階のものであることになる。そこで次にプロクロスはこれを確定し、その意味を明確にするのである。そのテキストは以下のとおりである。

(IV)「しかし、それは一であり同時に \wedge 一なるもの \vee を分有してい

て、そしてこのゆえにそれ自体で一ではないのだから、それは一でありかつ一ではない。つまりそれは \wedge 一なるもの \vee 以外の何かである。一方ではそれは一以外の余計なものを持ったという点で一でない。また他方ではそれは一を受け取ったという点で一である。

それゆえ \wedge 一なるものを分有したもの \vee はすべて一でありかつ一でないことになる⁽¹⁶⁾。」

(二二五) これを詳しく検討しよう。

(1)「しかし、それは一であり同時に \wedge 一なるもの \vee を分有していて、そしてこのゆえにそれ自体で一ではないのだから、」

つまり、「一を分有したもの」は「純粹の一」と「純粹の多」の可能性も考えられるが、しかしそれらは実際には不可能でありまた成立しないのである。すなわち、それは「多」であるが「純粹の多」ではなく(二三、「何らかの一」である。しかしそれは分有しているのだから「純粹の一」でもない。

(二二六) そして次に、

(2)「それは一でありかつ一ではない。つまりそれは \wedge 一なるもの \vee 以外の何かである。」

それは「何らかの一」であるからともかくも「一である」。しかしそれは「純粹の一」でないから絶対的な意味で「一ではない」。つまり、「一でありかつ一ではない」という一見相矛盾する二つの性格を持っているのである。

この性格は先に見たところの(二三)プラトンにおけるイデアの分有の基本的性格の一つであった。ここからプロクロスは明確にプラトンの分

有思想を受けていることが確認されるのである。

かかる性格を持つものを目下のテクストは「一なるもの（純粹の一）以外の何か」と言っているのである。

〔二七〕 プロクロスはかかる性格を更に念を入れて説明するのである。

〔三〕 「一方では、それは一以外の余計なものを持ったという点ででない。また他方では、それは一を受け取ったという点で一である。」
「一を分有したものは「一以外の余計なもの」を持っている。これについてはここでは具体的に言及されてはいないが、例えば「有・ある」や「全体」や「部分」等である。これらのゆえにそれは「一ではない」のである。

また他方それは「一を受け取った」と言う点で一であると言われるのである。

このようにして分有の基本的性格である「一でありかつ一でない」の意味が明らかにされるのである。

〔二八〕 ここから結論へ至る。

〔四〕 「それゆえ \wedge 一なるものを分有したものの \vee はすべて一でありかつ一でないことになる。」

これが命題二の「テーゼ」となる。

第四節 本章の結論とまとめ

〔二九〕 さて、以上をまとめて結論を述べよう。

先稿では次の結論を得た。命題一では「純粹の多」は存在しないことが明らかにされたが、しかし「分有」の意味は十分には明らかにされていないかった。

命題二では分有の意味の明確化と共に「一なるものを分有したものと「一そのもの」との区別の明確化がはじまる。

プラトンの後期著作ではイデアの領域における分有が語られている。プロクロスの「一なるもの」と「一なるものを分有したものの」間に成立する分有はまさにこれである。

命題二のテーゼは「 \wedge 一なるものを分有したものの \vee は \wedge 一であると共に一でない \vee 」である。

〔三〇〕 この証明は四段階に分かれる。

第一段階では「一なるものを分有したものは一つの可能性として「一を受け取った」のであることが明らかにされる。

第二段階では、「一なるものを分有したものはまた一つの可能性として「純粹の一」であるとされるが、これは不可能である。

第三段階では、「一なるものを分有したものは最後の可能性として「あらゆる意味で一ではないもの」であるが検討される。しかし「あらゆる意味で一ではないもの」は「純粹の多」を意味する。だが、「純粹の多」は存在し得ないことが証明されている（命題二）。したがって残るところ、第一の可能性のみである。第四段階では、これを受けて「一なるものを分有し一なるものを受け取ったものは「一なるもの」を持っているがゆえに「一である」、しかしそれは「純粹の一」でないがゆえに「一以外の交ざりものを持つ。よってこの点で「一でない」のである。この「一でありかつ一でない」が分有の基本的な性格である。

第二章 命題三

第一節 命題三の「テーゼ」

〔二一〕 続いて命題三の検討にはいろう。

命題三のテーゼは次のとおりである。

「 \wedge 一と成るもの \vee はすべて \wedge 一なるもの \vee の分有によって一と成る⁽¹⁷⁾。」

この命題で「一と成るもの」($\tau\acute{o}\ \gamma\upsilon\nu\acute{o}\mu\epsilon\nu\acute{o}\nu\ \epsilon\nu$)が出現する。(これは既に命題二の証明部においてアリストテレスの不定法の形で出現している〔四〕)。この命題は「一」の「生成」について述べている。この場合の「一と成るもの」は勿論「純粹の一」ではなくて「多を含む一」「一なるものを分有したものの」を指している。ここにプロクロスのデュナミズムが見られる。

これは先に見たように〔二一三〕、プロクロスはプラトンの分有論を直接に受け継ぐ。だが、先稿で見た如く、プラトンのイデア論に対するアリストテレスの批判では「エイドス(イデア)は生成の原因とはなりえず、 \wedge 分有 \vee によっては事物は生成し得ない⁽¹⁸⁾」と言うものであった。とするなら、プロクロスはプラトンの分有論を、アリストテレスの右の分有論批判と、どのように調停するのであろうか。

プロクロスはここにアリストテレスの「現実態($\epsilon\acute{\nu}\epsilon\gamma\epsilon\tau\alpha$)と可能態($\delta\upsilon\nu\alpha\mu\iota\varsigma$)」の概念を導入して分有を考え、そこから「生成」と「分有」を結びつけるのである。なぜならアリストテレスにおいては現実態と可能態は「生成」の原理であるからである。

ここにプラトンとアリストテレスの一種の綜合が見られるのである。

第二節 アリストテレスの現実態と可能態

〔二二〕 そこで、「生成」と「現実態・可能態」に関するアリストテレスのテキストを少し調べてみなければならない。彼の『形而上学』第九卷第八章である。ここでは「現実態のほうが可能態よりも \wedge 先 \vee ($\pi\acute{o}\tau\epsilon\rho\omega$)である⁽¹⁹⁾」⁽²⁰⁾とが三つの観点において述べられている。

一つには「定義において」($\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$)であり、二つには「時間において」($\chi\rho\acute{o}\nu\alpha$)であり、最後には「実体において」($\sigma\upsilon\beta\acute{\epsilon}\tau\alpha$)である。

〔二三〕 生成の観点から述べられているのは主として「時間において」である。

先ずそこでこのテキストを以下に引用しよう。(傍点は筆者)

「だが、時間においては、つぎの意味では「現実態のほう」先である、すなわち、その種において可能的なものと同一であるところの現実的なものは、〔可能的なものよりも〕より先である、という意味では先である⁽²⁰⁾、…しかも、さらにそれら(種子等)よりも時間において先に、他の現実的に存在するものどもがあつて、これらからそれら(種子等)は生成したのである。というのは、可能的に存在するものから現実的に存在するものが生成するのは、常に、或る〔同じ種の、数的には他なる〕現実的に存在するものによってだからである。たとえば、人間は人間からであり、教養的なものは教養的なものによつてであるが、そこには、常に第一の動かす或るものがある。そしてこの動かす或るものはすでに前もつて現実的に存在している⁽²¹⁾。」

〔二四〕 ここでは、次のことが言われている。

(1) 現実的にあるものの方が可能的にあるものより時間的に先で

ある。

- (2) 両者は「種」において同じであるが、「数」においては異なる。
(3) 先に現実的に存在するものによって、可能的にあるものから、現実的にあるものが生成する。例えば、人間(親)から人間(子)が生成するようにである。

ここでアリストテレスが考えている現実態や可能態にあるものとは主としてこの現象世界内の存在者つまり自然本性(φύσις)なのである。

- (4) かかる生成のもとには「常に第一の動かす或るもの」があり、既に前もって現実的に存在しているのである。

(三五) さらに、これについて同書同章の「実体において」のテキストはこう述べている。

「それゆえに、明らかに、実体または形相は現実態である。そこで、この理由によって、或る現実態がその可能態よりも、実体において先であることは明らかである。そして、さきにわれわれの語ったように、或る一つの現実態には常に或る他の現実態が時間的に先だっている、そしてあの常に「永遠に」存在する第一の動かす者の現実態にいたるまで⁽²²⁾。」

ここでは(4)の関連下に「不動の第一動者」について語られている。

- (5) 可能態に先立つ現実態をたどっていくとついに時間的にも実体においても先立つ或る現実態つまり「常に存在する第一の動かすもの」にいたる。これがアリストテレスの神であるいわゆる「不動の第一動者」である。

(三六) 右で述べられた「先に現実的に存在するものによって、可能

的に存在するものから現実的に存在するものが生成する」という命題はアリストテレスの「動」の原理である。これは「可能態にあるものは既に現実態にあるものの触発を受けて現実態に成つていき、その結果動いていく」ことを意味しているからである。

さて、もし以上の原理を「一」の生成(これは一種の「動」である)に適用すれば一体どうなるであろうか。

「可能態において一であるもの」が「現実態において一であるもの」に成るためには「現実態にある一」が先になくはならないことになるであろう。そして「先に現実態にある一」を「純粹の一」とあるとし、「現実態において一と成つたもの」を「一なるものを分有したもの」と解釈するなら、ここに命題三が出てくるのである。

(三七) しかしここには注意しなければならない事柄がある。

まず第一に、「先に現実態にある一」「純粹の一」はアリストテレスの「不動の第一動者」ではない。「先に現実態にある一」はむしろプラトンの「善のイデア」にあたるであろう。

第二に、プロクロスは命題三までで現実態と可能態について直接には何も言及していない。

第三に、アリストテレスでは現実態と可能態は同じ種においてあるが、プロクロスの「純粹の一」と「一を分有したもの」は同じ種に属するとは言い得ない。

したがって「純粹の一」を「先に現実態にある一」とし、「一なるものを分有したもの」を「現実態において一と成つたもの」とすることには飛躍があり、プロクロスとアリストテレスを安易に結合することになりはしないかと思われるのである。

しかし、Dodgは命題三の背景には右のアリストテレスの原理が暗黙の内に前提されていると言う⁽²³⁾。

確かに彼の言うごとくアリストテレスの右の原理を仮定すれば命題三の「生成」はよく理解される。またプロクロスはこの原理を命題七七でひとつの定

理としても取りあげて証明している。これらを考え合わせるなら Dods の主張は成り立つと思われるのである。

第三節 命題三の「証明」

〔三八〕 そこで命題三の証明を見ていくことにしよう。証明は二段階にわたって行われているが、その論旨はわりあい単純である。

(一) 「一と成るもの」(Ⅰ「多」) は「一なるもの」の分与を受け取る。
(二) それゆえ「多」は「一なるもの」を分与することによって一と成る。

〔三九〕 そこで、先ず第一段階から見ていこう。そこで、そのテクストを引用することになろう。

(Ⅰ) 「一と成るもの」Ⅰは、一方では、それ自体で一ではなく、他方では、一なるものⅠの分与を受け取っている限りで一なのである。なぜなら、もしそれ自体において一でないものⅠと成るのであれば、それらは明らかにお互いに集まって共同することによって一と成るのであり、そして一まさの一であるものⅠであることなしに一なるものⅠの臨在の下にとどまるからである⁽²⁴⁾。

〔四〇〕 これを分析してみよう。

(1) 「一と成るもの」Ⅰは、一方ではそれ自体で一ではなく、他方では一なるものⅠの分与を受け取っている限りで一なのである。

「一と成るもの」はすでに見たごとく〔四〕、それは「一なるもの」(「純粹の一」)ではない。それは「一なるもの」を受け取ったのである。そ

してその限りにおいて「一」である。

〔四一〕 次に、その理由が付される。

(2) 「なぜなら、もしそれ自体において一でないものⅠと成るのであれば、それらは明らかにお互いに集まって共同することによって一と成るのであり、そして一まさの一であるものⅠであることなしに一なるものⅠの臨在の下にとどまるからである。」

その理由とはこうである。それ自体で一でないものⅠの共が一つものに成るのはどのようにしてであるのか。それは、それぞれがお互いに集まって共同することによってである。こうして一と成ったものは「まさの一であるもの」(「一そのもの」)となるのではなくて、「一そのもの」の臨在の下に留まるものとなるのである。

〔四二〕 すでに述べたごとく〔三七〕、この考えの背後にはアリストテレスの現実態と可能態の思想が前提されていることが具体的に窺われる。

「一そのもの」は「既に現実態にある一」である。この臨在の下へ「可能的に一」である「多」(Ⅱ「それ自体は一ではないものⅠ」)が入るとき、「多」はかの「既に現実態にある一」に触発されて「現実的な一と成る」のである。つまり「多」は統一性を持つに至るのである。

それゆえ、ここに「生成」というデュナミズムはいることができるのである。これが「一なるもの」を「受け取る」(πρόκειν)ということに他ならない。

〔四三〕 次に、第二段階のテクストを引用しよう。

(Ⅱ) 「したがって、それらは一と成ることを受け取る限りにおいて

△「なるもの」を分有しているのである。なぜなら、一方、もしそれらがすでに「一」であるなら、一と成ることはないし——というのも、有（存在者）が△すでに存在しているもの△に成ることはないからである——、他方、もしそれらが先には「一」でなかったものから一と成るのであれば、それらの中に何らかの「一」が生じることによって、△「なるもの」を所有することになるであろうからである⁽²⁵⁾。」

〔四四〕 これを分析してみよう。

(1) 「したがって、それらは一と成ることを受け取る限りにおいて△「なるもの」を分有しているのである。」

多は「一つのものに成ること」を受け取ることによって「一なるものを分有する」。つまり「一の生成」は「一の分有」を意味しているのである。ここにアリストテレスの現実態と可能態の原理のもとに、「生成」即「分有」となるのである。

〔四五〕 次に、その理由が述べられる。

(2) 「なぜなら、一方、もしそれらがすでに「一」であるなら、一と成ることはないし——というのも、有（存在者）が△すでに存在しているもの△に成ることはないからである——。」

もし「多」がすでに「一」であるなら、一となることはない。その理由はこうである。多が「一」であるならそれは「有」(ὄν)である。そして「一と成る」ことは「存在する」(つまり「有と成る」)ことと同じである。したがって有はすでに「存在している」のだから、もう有に「成る」必要はないのである。

〔四六〕 ここにはじめて術語としての「有」(ὄν)が出現する。(今までに出てきた²⁴は分詞としての用法である。)そしてここに「一者と有との区別が想定されるのである。一者は有ではない。一者は存在ではない。有は「一に成る」ことによって「存在する」のである。

一者は「現実態にある一」ではあるとしても、如何なる意味においても決して「現実態にある有」ないしは「純粹現実態としての存在」(actus purus essendi)ではないのである。(ここに中世哲学、例えばトマス哲学との相違が見られる⁽²⁶⁾)。

〔四七〕 次に、

(3) 「他方、もしそれらが先には「一」でなかったものから一と成るのであれば、それらの中に△何らかの「一」△が生じることによって、△「なるもの」を所有することになるであろうからである。」

「先には「一」でなかったもの」(「多」とは「可能的な一」である。そして「一と成る」とは「現実的な一に成る」ことである。

そしてこの中に生じた「何らかの「一」は「分有された一」であって、「純粹の「一」ではない。「純粹の「一」は「分有されない一」である。そして「先には「一」でなかったもの」(「多」が「一」を分有するもの」である。これらの区別は後の命題三、二画で言及される。

〔四八〕 そして結論に至る。これは以上から明らかであるので記されていないが、念のために補っておこう。

(4) 「よって、△「一と成るもの」△は△「一なるもの」△を分有することによって「一と成る」。

これで命題三のテーゼに戻るのである。

以上で、「一を分有すること」(heterēon tou évoc) は、実は「一と成ること」(to pnyēdhai ēn) であることが明らかになった。ここにプラトンにはないデュナミズムが見られる。つまりこの命題はプラトンの「分有」とアリストテレス的な「生成」を結び付けている。

これは、さらに観方を変えれば、命題二よりも一層踏み込んで「分有」を限定していると言えるであろう。これが命題三の意味である。

第四節 本章の結論とまとめ

〔四九〕 以上をまとめよう。命題三には「分有」即「生成」とするプロクロスのデュナミズムが見られる。

アリストテレスは生成を「先に現実態にあるものによって、可能態にあるものから、現実態にあるものが生じる」と捉える。

これをプロクロスの「分有」の思想に当てはめてみよう。

「一なるもの」を「先に現実態にある一」とし、次に「多」を「可能態にある一」とし、最後に「一を分有したもの」を「生成して現実態にある一」とする。そこで、「先に現実態にある一」の触発を受けて「可能態にある一」は「現実態にある一」と「成る」のである。

このようなアリストテレス的考えを暗黙の前提に命題三が提出されている。

そのテーゼは「 \wedge と成るもの \vee はすべて \wedge 一なるもの \vee の分有によって一と成る。」である。

その証明の論旨はこうである。

- (一) 「一と成るもの」(「多」は「一なるもの」の分有を受け取る。
- (二) それゆえ、「多」は「一なるもの」を分有することによって「一と成る。

ここに「分有」即「生成」と捉えられているのが見られる。

よってこの命題三はプラトンとアリストテレスの或る意味での総合であるとも言えよう。また命題二に引き続いて分有をさらに限定していると言えよう。

〔五〇〕 ところで、注目すべき一つのことが見られた。この命題の証明部に初めて一者と区別された有 (to on) が出現することである。

「一なるもの」はある意味で「一の純粹現実態」であると考えられるが、しかしこれは「有ないし存在の純粹現実態」ではない。この点で中世哲学(たとえばトマス哲学)と決定的に異なると言わねばならない。

全体の結論

〔五一〕 各章の結論で見られた如く、これまでの二つの命題は「分有」の意味を明確にした。一つはプラトン哲学を受けて、一なるものの分有は「一でありかつ一でない」の性格を持つとなす。また一つにはアリストテレス哲学を受けて現実態と可能態の観点から、一なるものの分有を生成と結合する。このようにして言わば両哲学を総合するのである。しかしプロクロス哲学は「一なるもの」を「存在」と捉える中世哲学と根本的に異なる。

註

- (1) 拙稿「プロクロスにおける「一者」の研究(一)」—— *Στοιχειώδης θεολογική* (Prop. I) —— (『高知大学学術研究報告』・第三六卷・人文科学篇・一九八七年) 九二—一〇五頁
- (2) E. R. Dods, *Proclus The Elements of Theology*, Oxford, 1963, p. 188
- (3) 前掲拙稿「五頁」(二)

- (4) Proclus, *Elementatio Theologica* (原上 Elem. theol. 上卷下). prop. 2. Πάν το μετέχον τοῦ ἐνός καὶ ἐν ἐστὶ καὶ οὐχ ἔν.
(5) 前掲註釋 一一頁 [十]
(6) Platon, *Parmenides*, 157 e 2-3. Εἰ ἄρα τὰλλα μῖα ἐχει, κἂν τοῦ ὅλου τε καὶ ἐνός μετέχοι.— (本文引用の訳は岩波書店『プラトニ全集』244頁)
(7) *ibid.* 158 a 3-6. Μετέχοι δὲ γε ἂν τοῦ ἐνός ὁπλῶν ὅτι ἅλλο δὲ ἢ ἐν οὐ γὰρ ἂν μετέχεν, ἀλλ' ἢν ἂν αὐτὸ ἐν. νόη δὲ ἐνὶ μέν εἶναι παλὴν αὐτῷ τῷ ἐνὶ αὐθιγὰν σου. (本文引用訳は前註 247頁)
(8) *ibid.* 135 d 3-5.
454頁『プラトニ全集』四 解説 三四一—三四六頁参照
(9) Platon, *Sophistes*. 244 d-245 b 3. ΕΕ. τί δέ; τὸ ὅλον ἕτερον τοῦ ὄντος ἐνός ἢ ταῦτον φησούσι τοῦτο; ΘΕΑΙ. Ἰὼς γὰρ οὐ φησούσι τε καὶ φασίν; ΕΕ. Εἰ τοίνυν ὅλον ἐστίν, ὥστερ καὶ Παρμενίδης λέγει, ἰδάντοθεν εὐκόλῳ φάσκειν ἐναλγικὸν ὄγκῳ, μερόθεν ἰδιότητα πάντῃ· τὸ γὰρ οὔτε τι μείζον οὔτε τι βαϊότερον πλεῖναι. χρεὸν ἐστὶ τῇ ἢ τῷ, τοιοῦτόν γε ὅν τὸ ὄν μέδον τε καὶ ἔδχατα ἔχει, ταῦτα δὲ ἔχον πάσα ἀνάγκη μέρη ἔχεν· ἢ πως; ΘΕΑΙ. Οὕτως. ΕΕ. Ἀλλὰ μὴν τὸ γε μεμεριμένον πάθος μὲν τοῦ ἐνός ἔχειν ἐπὶ τοῖς μέρεσι πάνθιν οὐδὲν ἀποκωλύει, καὶ ταύτῃ δὴ πᾶν τε ὄν καὶ ὅλον ἐν εἶναι; ΘΕΑΙ. Τί δ' οἶ; ΕΕ. Τὸ δὲ περὶ ὅθονος ταῦτα ἄρ οὐκ αὐθιγὰν αὐτὸ γε τὸ ἐν αὐτὸ εἶναι; ΘΕΑΙ. Ἰὼς; ΕΕ. Ἀμείβεσθῆσαι δὲι παντελῶς τὸ γε ἀληθὺς ὄν κατὰ τὸν ὁρθὸν λόγον εἰρησθῆναι. ΘΕΑΙ. Δεῖ γὰρ οὖν. ΕΕ. Τὸ δὲ γε τοιοῦτον ἐκ πολλῶν μερῶν ὄν οὐ διωφωμήσει τῷ [ὁλόῳ] λόγῳ. ΘΕΑΙ. Μανθάνω. (本文引用訳は註 247頁)
(10) Cousin, *Pach commentarius in platonis parmenidem*, (Hildesheim, 1980) 697. 2-6. ei δὲ μία μὲν ἢ ἀρχὴ πλῆθος ἔχουσα χαθ' ἐαυτήν, ὅλον τι ἔσται καὶ ἐκ μερῶν τῶν ἐν αὐτῇ πολλῶν ἢ ἐκ στοιχείων τοῦτο δὲ οὐχ ὡς ἀληθὺς ἐν, ἀλλὰ περὶ ὅθονος τὸ ἐν, ὡς ἐν Σοφοδῶτῃ μεμνησθῆναι.
(11) 前掲註釋 六頁 [四]
(12) Proclus, *Elem. theol.*, 2. ei γὰρ μὴ ἐστὶν αὐτοῦ (μετέχει γὰρ τοῦ ἐνός

ἅλλο τι δὲν παρὰ τὸ ἐν), πέρονθε τὸ ἐν κατὰ τὴν μεθέξιν καὶ ὑπέμεινεν ἐν γενέσθαι.

- (13) *ibid.*, ei μὲν οὖν μηδὲν ἐστὶ παρὰ τὸ ἐν, μόνον ἐστὶν ἐν· καὶ οὐ μεθέξει τοῦ ἐνός, ἀλλ' αὐτοῦ ἐστὶν.
(14) *ibid.*, ei δ' ἐστὶ τι παρ' ἐκεῖνο, ὃ μὴ ἐστὶν ἐν, [τὸ μετέχον τοῦ ἐνός καὶ οὐχ ἐν ἐστὶ καὶ ἐν, οὐχ ὥστερ ἐν ἅλλ' ἐν ὄν, ὡς μετέχον τοῦ ἐνός] τοῦτο ἄρα οὐχ ἐν ἐστὶν, οὐδ' ὥστερ ἐν.
(15) 前掲註釋 一一頁 [三]
(16) Proclus, *Elem. theol.*, prop. 2. ἐν δὲ ὄν ἅμα καὶ μετέχον τοῦ ἐνός, καὶ οὐα τοῦτο οὐχ ἐν καθ' αὐτὸ ὑτάχον, ἐν ἐστὶ καὶ οὐχ ἐν, παρὰ τὸ ἐν ἅλλο τι δὲν ᾧ μὲν ἐπλεονάσκειν, οὐχ ἐν ᾧ δὲ πέρονθεν, ἐν, πᾶν ἅμα τὸ μετέχον τοῦ ἐνός καὶ ἐν ἐστὶ καὶ οὐχ ἐν.
(17) *ibid.*, prop. 3. Πάν τὸ γινόμενον ἐν μεθέξει τοῦ ἐνός γίνεσθαι ἐν.
(18) 前掲註釋 一一四頁 [一—二]
(19) Aristoteles, *Metaphysica*, 1049 b 5. φανερόν ὅτι πρότερον ἐνέργεια δυναμείος ἐστὶν.
(20) *ibid.*, 1049 b 17-19. τῷ δὲ χρόνῳ πρότερον ὥδε· τὸ τῷ εἶδει τὸ αὐτὸ ἐνεργῶν πρότερον, ἀριθμῷ δ' οὐ.
(21) *ibid.*, 1049 b 23-27. ἀλλὰ τοῦτων πρότερα τῷ χρόνῳ ἔτερα ὄντα ἐνεργεία ἐξ ὧν ταῦτα ἐγένετο· δεῖ γὰρ ἐκ τοῦ δυναμείος ὄντος γίνεσθαι τὸ ἐνεργεία ὄν ὑπὸ ἐνεργεία ὄντος, οἷον ἀνθρώπος ἐξ ἀνθρώπου, μουσικὸς ὑπὸ μουσικοῦ, δεῖ κινουμένου τινος πρώτου· τὸ δὲ κινῶν ἐνεργεία ἦδη ἐστὶν. (本文引用訳は岩波書店『アリストテλης全集』244頁)
(22) *ibid.*, 1050 b 2-6. ὥστε φανερόν ὅτι ἡ οὐσία καὶ τὸ εἶδος ἐνεργεία ἐστὶν. κατὰ τε δὴ τοῦτον τὸν λόγον φανερόν ὅτι πρότερον τῇ οὐσίᾳ ἐνέργεια δυναμείος, καὶ ὥστερ εἴποιεν, τοῦ χρόνου δεῖ προαγαθῆναι ἐνέργεια ἔτερα πρὸ ἑτέρας ἕως τῆς τοῦ δεῖ κινουμένου πρώτως.
(23) Dodds, *op. cit.* p. 190. (本文引用訳は註 247頁)
(24) Proclus, *Elem. theol.*, prop. 3. αὐτὸ μὲν γὰρ οὐχ ἐν ἐστὶ, καθὼ δὲ πέρονθε τὴν μετοχήν τοῦ ἐνός, ἐν ἐστὶν. ei γὰρ γίνουτο ἐν ᾧ μὴ ἐστὶν ἐν καθ'

αὐτά, συνόντα δήπου καὶ κοινωνούντα ἀλλήλους γίνεσθαι ἔν, καὶ
ὑπομένει τὴν τοῦ ἐνὸς παρουσίαν οὐκ ὄντα ὅπερ ἔν.

- (25) *ibid.*, μετέχει ἅπα τοῦ ἐνὸς ταύτῃ, ἥ πάσχει τὸ ἐν γενέσθαι. εἰ μὲν
γὰρ ἥδη ἐστὶν ἔν, οὐ γίνεται ἔν τὸ γὰρ ὅν οὐ γίνεται ὁ ἥδη ἐστίν. εἰ
δὲ γίνεται ἐκ τοῦ μὴ ἐνὸς πρότερον, ἔξκει τὸ ἐν ἐγγενομένου τινὸς ἐν
αὐτοῖς ἐνός.

- (26) 例えは、トマス哲学では万有の根源は「第一の有」である。(Summa
theologiae, I, 3., c. 等)

(平成元年十月五日受理)

(平成元年十二月二十七日発行)

Studium des Einen bei Proklos (II)

— Eine Bedeutung von μέθεξις τοῦ ἑνός —

OKAZAKI Fumiaki

(Seminar für Philosophie der Philosophischen Fakultät)

INHALT

Einleitung	(2)
I Propositio 2	(3)
1 Thesis der Propositio 2	(3)
2 Teilnahme bei Platon	(3)
3 Beweis der Propositio 2	(6)
4 Eine Zusammenfassung	(9)
II Propositio 3	(10)
1 Thesis der Propositio 3	(10)
2 Wirklichkeit und Möglichkeit bei Aristoteles	(10)
3 Beweis der Propositio 3	(12)
4 Eine Zusammenfassung	(14)
Ein Schluß	(14)
Anmerkungen	(14)

ZUSAMMENFASSUNG

Propositio 2 klärte auf, daß die Teilnahme des Einen den Charakter von „Ein zu sein und Ein nicht zu sein“ Mehr gibt, die Proklos aus dem Platon übernimmt. Propositio 3 klärte auf, daß Proklos die Teilnahme am Werden unter dem Aristotelischen Begriff der Wirklichkeit und Möglichkeit anknüpft. Folglich kommt eine Synthese von Platos und Aristoteles Philosophie darin zustande. Aber die proklische Philosophie ist von der mittelalterlichen Philosophie darin gründlich unterschieden, daß diese das Sein und jene das Eine, das kein Eines ist, als das erste Prinzip steht.

(Kochi, den 30. 9. 1989)

